

Dialogue 11

 **EAA Booklet - 36**

East Asian Academy For New Liberal Arts
Joint research and education program
by The University of Tokyo and Peking University

Hang Kim × Takahiro Nakajima

[金杭 × 中島隆博 2024年1月17日]



EAA Dialogue 11



EAA Booklet - 36

East Asian Academy For New Liberal Arts
Joint research and education program
by The University of Tokyo and Peking University

Hang Kim × Takahiro Nakajima

[金杭 × 中島隆博 2024年1月17日]

EAA

Contents

序 中島隆博（東アジア藝文書院学術顧問）	1
対談 金杭×中島隆博	2
対談の後に	38
不断に再開される対話のために（金杭）	38
東アジアの未来（中島隆博）	40
対談者について	42

序

中島隆博 (EAA 学術顧問)

2019年に発足した東アジア藝文書院は、東アジア教養学という来るべき学問のために、その成果を積極的に刊行していこうと考えています。ここにお届けするのは、EAA ダイアログと銘打ったシリーズです。

ダイアログとはプラトンに由来する概念で、dia-logos すなわち「ロゴスを通じて」という古い意味を有しています。そして、その「ロゴス」には、言葉や論理に加えて、万物の根源や批判的な切断という複数の意味が重層的に交差しています。東アジアの概念に翻訳をするならば、おそらく「道」や「文」ということになるでしょう。「道」は語ることであり根源でありますし、「文」もまた言葉であり切り分けられたパターンであるからです。重要なことは、ダイアログは誰かとともに対話を行い、お互いにロゴスを吟味しあって、新しい地平を開こうとすることだと思えます。

EAA ダイアログは、東アジア藝文書院に集っていただいた方々との対話から生まれています。読者のみなさまには、そこに込められた学問への思いや望みを受け止めていただければ幸いです。何ができるかだけでなく、何を欲するのかが、来るべき学問にとってはどうしても必要なことだからです。

COVID-19のパンデミックであぶり出されたのは、「既知」の諸問題でした。それらはすでにわかっていたにもかかわらず、様々な理由から「できない」とされてきたものです。来るべき学問は、そうした「既知」の枠組みを乗り越えるために、真に「未知」なるものに触れる責任があると思えます。それは、おそらく希望という次元にあるものだろうと思えます。

EAA ダイアログを通じて、希望の次元にある「未知」なるものを、ともに思考したいと思えます。

Hang Kim × Takahiro Nakajima

[金杭 × 中島隆博 2024年1月17日]

ヤクザと日本の戦後民主主義

中島 本日は金杭先生をお招きいたしまして、第11回となるEAAダイアログを始めたいと思います。よろしくお願いたします。ほぼ1年滞在されたので、だいぶ研究も進みましたでしょうか。

金 いや、本を1冊書こうと思っていたのですが、さすがに終わっていません。

中島 でも書き始めたのですね。

金 もう書き始めて、半分以上は進んだのですが。

中島 それは素晴らしい。

金 来るときは、まあ書けるだろうと思って来たのだけれども、全然進まなくて。

中島 いや、そう簡単ではないですよ。

金 全然。博論を書いた後に初めてモノグラフというものを書くので、結構長い呼吸で書くというのは10年ぶりぐらいなのかな。

中島 その間は短い論文をお書きになっていたわけですね。

金 短い論文だけです。ほとんどそうです。本を出したのは全部その論文を集めて出すみたいな感じだったので。

中島 では、今は書き下ろしで書いているということでしょうか。

金 そうです、書き下ろしで書いています。

中島 テーマは何ですか。

- 金 テーマはヤクザなのです。
- 中島 ヤクザですか。
- 金 ええ。
- 伊野 駒場のレクチャーでもテーマにされていましたね。
- 金 そうです。日本のヤクザのことを書いています。
- 中島 なるほど。もうすぐなくなってしまう感じがしませんか。
- 金 だから、なぜなくなっていくのか、それは何を語ってくれるのかという
ことをテーマに書いているのです。
- 中島 なるほどね。一時期などは日本の社会において隠然たる力を持って
いましたけれども、最近では高齢化も進んでずいぶん小さくなったと聞
いています。
- 金 もう数的にも全盛期に比べると12分の1ぐらいになっていて。
- 中島 最大の要因は何なのですか。
- 金 暴対法と暴対条例ですね。
- 中島 法律の力が大きいのですか。
- 金 法律と、2011年に全都道府県で施行された暴力団排除条例です。あ
れが結局、暴力団だけを取り締まるのではなくて、彼らと商取引をし
たり、言うならば家を貸したり、携帯を作ったり、銀行の口座を設け
たり、職を斡旋したり、そういうものを全部禁止しているから、もう
ヤクザをやっていると全然生活ができないのです。
- 中島 なるほどね。
- 金 結構、ドキュメンタリーなどあるのです。それを見ると悲惨な感じ
ですよね。
- 中島 もう食うや食わずになってしまっているのでしょうかね。
- 金 言うところのシノギというのがもう全然なくて、最近はウナギの稚魚
とか、ああいうものを密猟したり。東北の田舎ヤクザなどはナマコの
密猟をして闇ルートで中国に輸出しています。そういうことでしか
食っていけないみたいな感じなのです。
- 中島 では、本当に命運が尽きてきそうですね。
- 金 そうですね。大きい組織のトップクラスの幹部たちは、元々それなり
にお金があったということだけでも、今、若い人でヤクザになると
いう人が全然いないらしいですね。

中島 それをあえて取り上げるということは、例えば戦後の日本の社会においてヤクザがどういう役割を果たしたかとかを考えるとということでしょうか。

金 そうですね。現在の状況でヤクザがあのように衰退していくことが日本社会の何を見せてくれているのか、ということを考えています。テーマとしては、日常的な衛生感覚というものがどのようにヤクザ的なものを排除していくのか、ということです。社会学的な側面、政治的な側面、経済的な側面もあるのだけれども、結局、法制的というか治安の構造から見ると、他の国もそうですが、日本は特に公安と一般警察が分かれていて、公安が公的秩序、一般警察が一般の刑事事件というように腑分けされていました。ところが暴対法と排除条例によって、公安が日常の一般刑事的なものに入ってきて、識別が不可能になっている。要するに、ヤクザの経済活動や日常生活を取り締まるのが公的な秩序の維持につながる。それはどういうことかという、私的な領域において、ヤクザというものを市民の自律的な取り締まりによってどんどん排除していき、公的秩序を守っていくということです。その結果、私的領域と公的領域の入り乱れ、識別困難性を生み出している。そして、日常生活において公的な衛生、政治的な衛生を市民が担うようになってきているということです。これが多分、2010年代のヘイト現象や、日本の戦後の民主主義のある種の変質を見せてくれるのではないかと考えています。

中島 なるほど、それは面白いですね。

金 もちろん、そのことを説明するために戦後の日本社会においてヤクザがどのような、ある種の例外地帯を構成し続けてきたのかということを経史的に俯瞰する必要があるわけです。

「食べる口」から見える日本社会

中島 金さんは政治哲学がご専門と申し上げていいわけですね。

金 まあ、そうですね。

中島 幅広く研究されていますけれども、やはり中心は政治哲学ですね。先ほど例外状態のようなことをおっしゃいました。カール・シュミッ



金杭氏

ト的な枠組みを利用しながら、博論などでもそうですが、権力と例外状態の問題をずっと探求してきたわけです。その対象が今、たまたまヤクザになっているということですかね。

金 そうですね。僕が最初、韓国で出した本が『話す口と食べる口 (Speaking Mouth and Eating Mouth)』¹でした。今おっしゃったようにシュミットの議論や、当時みんな読んでいたアガンベンが論じているようなゾーエーとディオス、もっと古典的な哲学でいうと「魂と肉体」という二元論の中で、人間的なものがどのようにして肉体というもの、もしくは動物的なものを排除しながらできていくのかということテーマにして書いた論文や文章を集めた本でした。その本を書いた後、実はずっと「話す口」だけに集中してきました。他の言い方をすると、偉い先生方、思想家を研究の対象にしていたのですね。

中島 なるほど。

金 でも、「食べる口」の方をこれからは考えていこうかなと思っています。政治哲学が成り立つある種の限界、つまり、政治哲学は何を考え

¹ 原題は『말하는입과먹는입』(새물결, 2009)。

ないという条件で成り立っているのか、ということが関心事です。政治哲学が考えていなかった、でも政治哲学がその中に取り込んでいる問題をどうやって考えていくのか。ヤクザというのも結局、日本の政治哲学だけでなく社会学、歴史学、いろいろな学問の中で、ある種の逸脱もしくは犯罪ということで、例外的な何かとして扱われてきた、もしくは扱われてこなかったわけです。けれども、もう少しヤクザという存在を日本の近代の中で非常に構成的な、必須的に要請されたある種の集団として据えたときに、日本の社会はどう見えるのかということをやっけていこうと思っています。

中島 それは、やはり背景に丸山眞男の問題系がありますね。

金 もちろんそうです。

中島 丸山眞男が日本のウルトラナショナリズム（超国家主義）を問題にするとときに、やはり権力と無法者の関係に非常に注目していたわけです。そうすると、今、ヤクザというものに注目することによって、それと当然、権力の関係が問題になりますよね。

金 そうですね。丸山眞男は1940年代に書いた「軍国支配者の精神形態」の中で、アウトローという人たちはどのような生活をしているか、一般の市民と比べてどのような特徴があるのかという10個ぐらいの項目を羅列しています。それを、亡くなりましたけれども宮崎学という有名な作家が『ヤクザと日本』²という本の中で裏返して、丸山眞男の描いている市民が、いかにアウトローというものを排除した上で、もしくはそれとの関係の中で描かれているのかということを書いているのです。市民と正反対の形象としてのヤクザというよりも、ある種、市民的なものというものが成り立つ条件として、そういうものがどうやって排除されながらも包含されるのかに関心があります。町のあちこちに事務所がある厳然とした存在なのに、ある種、日常的な市民的空間の中には全く外部として共存している。こういうことをもって違った形で捉えられるのではないか。他のいろいろな背景としては、網野善彦の史学やアジール論を補助線として見ているというところ です。

² 宮崎学『ヤクザと日本』ちくま新書、2008年。

中島 市民とヤクザの関係は、きれいに二項対立的に分かれるものではないわけですね。

金 そうですね。

中島 その間にいろいろなグレーなレイヤーが当然あるわけです。私が10代のときは、若者が暴れていました。学校は本当に危険な場所だったのです。そういうヤンキー的なのか、今だったら半グレみたいな集団がいるわけです。でも、そういった人たちがずっとそうだったかという、必ずしもそうではなくて、ある程度大人になると、普通のいい人になる回路もあったわけです。もちろん中にはヤクザの世界に入っていこうと決めてしまう人もいますが。若者の、特にある時期に起きるエネルギーの爆発みたいなものをどう振り分けていくのかというときに、市民とヤクザが織りなすレイヤーが結構効いていたという気がするのですね。

金 多分おっしゃるとおりで、高度成長期を経て、その後、社会の中で、自分の人生の組み立て方というものがある程度予測可能な形で、もしくは標準化された形で成り立ってくると、今おっしゃったヤンキー的なもの、不良的なもののエネルギーが、学生るときはそれなりにどこか居場所を求めているというのがあったのが、社会に出てくるとどうなってくるのかといった場合に、ヤクザのレイヤーがある種の受け皿になったり、何かになったりという時代はあったと思うのです。

中島 ありましたよね。

金 ええ。現在の話を歴史的な系譜の中で見ると、近代的なヤクザは、結局、農村の次男、三男など、要するに体一貫で近代初期の埠頭や炭鉱に出てくる連中を束ねて仕事を腑分けしたり、お互いに助け合ったりする組織として出来上がってきます。もちろん乱暴なこともするわけです。要するに、近代の本源的蓄積の過程の中で、都市部で一種、労働組合のような、会社のような働きを担っていたのがヤクザ組織の近代的な起源なわけです。戦前には、実はそういう物理的な基盤においてヤクザの親分が衆議院議員にもなったり、地域の名士として地域のいろいろな顔役として存立したりします。いうなれば近代化以降に存続するある種前近代的な社会権力というか…。

中島 遺制のようなものですね。

中間団体としてのヤクザ？

金 そういうものを担っていた。そして戦後になると、そういった連中が焼け野原の中で自警的な役割を担ってくる。そこでまた地域の中で顔役として成立してくる。そこに、生業に就けない連中が集まってくる。そういう社会的な必然性が、この集団の形成・維持には条件としてあったわけです。これが高度成長期以降、その後に出てくるイメージとして犯罪集団になる。そういう系譜が描けると思います。こういう歴史的な系譜を突き詰めて整理していくと、結局、社会の中で行きどころのないエネルギーや、もしくは生い立ちの条件の中で行きどころのない、どうしようもない連中の居場所と言ったらおかしいのですが、受け皿というか、そういう社会的な機能を彼らが確かに持っていたわけです。現在の場合は、そういった受け皿の機能を強制的に剥奪されたときに、社会がそのエネルギーをどのように受け止めるのか、もしくはそのエネルギーにどうやって社会的に対処できるのかという大きな問題と向き合っているということです。歴史的にみると、ヤクザは政治権力とも非常に強い癒着もあったし、特にバブル期などは不動産資本と密着して莫大な富を蓄積したりしました。そういうところを日本社会論としてどうやって位置付けられるのかということ、日本の社会学者、人文学者、欧米の研究者を含めて、あまり論じていないのですね。

中島 確かにあまり聞いたことがないですね。

金 ないですね、あまり。

中島 今でも、そのヤクザが果たしてきた役割に代わるものは特にないわけですよ。

金 ないですね。

中間団体としてのヤクザ？

中島 そのヤクザが犯罪集団化されてしまったことによって、グレーゾーンの人たちはどうするのかというのは結構厄介ですね。ただ、今よくオレオレ詐欺などというのがあるではないですか。あれは国際的な展開まで見せていて、いろいろな若い人がうっかり巻き込まれてしまうわけでしょう。でも、そこにはヤクザが持っているような、ある種の別

の仕方での成熟の論理みたいなものは全くないわけではないですか。完全に駒として使われていて、本当に危ないことに手を貸すのです。ああいったものでは、ヤクザ集団が持っていた受け皿の役割を果たすことはできないわけですよ。

金 そうですね。ヤクザがある意味、そういう受け皿として機能してきたということはいろいろな側面から解釈できると思います。日本の近代社会の特徴はいろいろあると思うのですが、その中の一つは、ある種のオールドスクールの法学・社会学の用語でいうと「中間団体」というものが非常に強く社会の中で生きていたことです。例えば経済学の中での議論で言えば、日本型の会社は、欧米と違って企業別に労働組合が組織されていて、それが経営側と協力して、会社というものを一種の家的なものとして育てていく。その中で、会社の利益もしくは利益の落ち込みを一緒に負担していく。そういった意味においては、日本型の経営はやはり中間団体という形です。要するに、欧米の個人と法人の契約関係を根幹とした会社の組織ではなくて、会社そのものが一種、生き物としてある。そういう中間団体的な強さがあったと思うのです。いいこともあれば悪いこともあったと思うのですが、それは結局、社会全体の法制の中で見たら、社会の法よりも、国家の法よりも、そちらの掟、内部ルールの方が…。

中島 強いわけですね。

金 そうです。そういった組織の構成の仕方、機能の仕方、生存の仕方が、日本社会の中では普通の企業だけではなくて、いろいろなもので見られたと思います。それは、ヨーロッパの中世以降の代表的な中間団体である大学や教会でも言えることですが、そうした団体のルールが社会全体のルールより先にできているわけです。その後、近代国家のルールとどうやって折り合いをつけるのかということが問題になりますが、日本でもやはりそれが反復されたと思うのです。その中で、中間団体的な掟というものがずっと生きていたというのが、日本的な社会の構成のされ方だと思います。ヤクザというのは、近代国家のある種の法制度的なものが整備される以前に、労働組合もしくは会社として存在したある種の団体です。その中で自生的につくられていくのが任侠だとか、親と子の疑似家族化であるとかですね。

中島 親分子分ですね。

金 親分子分の関係だとか、ああいう独特で内部的なルールがずっと生きていて、その中で規律化されていく。もちろんその規律の中で組織を維持し、生存させていくという目的のために国家の法とは対峙するわけですが、その内部に特有の合理的なルールというものがあります。それがやはりヤクザの強みだったと思うのです。これは多分、他の海外の組織犯罪団体と比べてもなかなかないものですよ。そういった意味で、ヤクザの日本的な独特性というものがあって、だからこそ、先ほど先生がおっしゃった犯罪に手を染める若い連中が内部の掟によって規律され、歯止めがかかるという側面がもちろんあったわけです。それが今、たがが外れたときに全部地下に潜ってしまって、半グレ的な連中が、今のオレオレ詐欺もそうだし、闇金もそうだし、言葉は悪いですが、ホームレスをダシに使って生活保護金などをくすねるなどの犯罪行為をしています。

中島 やっていますね、巻き上げています。

金 ブラック社会福祉関連と言いますか、ああいうことになると、今まで日本の警察がヤクザ対策としてヤクザと警察の間に持っていたある種のルールを基盤としながら、ヤクザが担っていたある種の犯罪の防止や犯罪の透明化・予測可能性という機能がなくなってしまって、警察の方でも半グレ的な犯罪への対処の仕方が本当に難しくなってくるという状況が今あるということです。

中島 海外、例えば韓国と比べてみると面白いかなと思うのですが。韓国にもヤクザ的な組織がありましたよね。

金 あります、もちろん。

中島 それは日本と何か違いがあるのですか。

金 一概にこれがこうだと言えないと思うのですが、韓国の場合にも内部の規律はもちろんあります。映画などで過剰に表象されるきらいはありますが、もちろんあるのです。けれども、日本のヤクザの一番特徴的なことは、代紋をビルや事務所におおっぴらに掲げて、何々組、何々会と公開的にその存在を知らしめて活動するというのではないのでしょうか。ああいう組織は本当に類を見ない。例えば中国のトライアドという有名な組織などは、秘密結社ですから秘密にします。



中島隆博氏

中島 秘密にしますよね。

金 もしくはアメリカのマフィアにしても、われわれはマフィアなんかではないと、自分の存在を否定しています。でも、1970年代、1980年代の日本のヤクザを今YouTubeで見られますけれども、ヤクザの組長や若頭が堂々と、自分たちの組織はこう変わりましたよという記者会見をしますよね。あれはほとんど例を見ないのではないかと思います。そういった現象のある種の社会的なマトリックスは何なのか。僕の考えの中では、やはり先ほど言った中間団体的なものです。だから、ヤクザというものが国家より先にできて、その団体のある種の自立性、法学的にいうと制度的保障体、もちろん法律的に決まったわけではないですけども、社会の慣習的な感覚の中でヤクザという団体的な結社の自立性を連綿と認めてきた歴史があるわけです。それをここ10年ぐらいで壊滅に追い込んでいるというのは、ヤクザだけの問題ではなくて、やはり日本社会の何かがドラスティックに変化したのではないかということが僕の主眼点です。

中島 そのドラスティックな変化というのは何なのでしょうね。

金 どうなのですかね。

政治の衛生化と中間団体の消滅

中島 つまり、中間団体がなくなってきたということですかね。

金 そうです。もちろんグランドナラティブとしては、日本社会を説明するとき、例えば民営化に象徴される新自由化、2000年代以降、もしくはその前の20世紀の終わりから始まる巨大国営企業の民営化、もしくは労使関係の変化、雇用関係の変化などといったことを挙げている研究がいろいろとありますけれども、やはり、新自由主義化という落とし所にみんな収斂しているような気がするのです。1970年代の終わりから1980年代に始まったグローバリゼーションという流れの中で日本社会のドラスティックな変化を解釈していく。既存の研究は、そういうパラダイムがずっと優勢だったのではないかと僕は思うのです。ただ、もちろんそれもすごく重要ですけども、僕がもう少し注目したいのは、1991年のソ連の崩壊以降の世界の情報機関です。冷戦というのは実際の戦闘ではなくて情報戦が一番重要だった。しかしそれを担ってきた警察組織、情報組織が、冷戦の終わりとともに任務を失ってくるわけです。

中島 要らないですよ。

金 要らないです。そして1991年辺りから出てくる動きが国際的な犯罪組織への対処です。国連が主導してずっとやってくるわけです。おそらく、日本のヤクザ対策や組織犯罪防止法といったところが、そういうグローバルな流れと密接に関わり合っている。ポスト冷戦のグローバルな構造変動を見る場合に、新自由主義とともに見なければいけません。組織犯罪に対処するという現象についても、その背景にあるグローバルな構造変動の意味は何なのかということと同時に問うていかなければなりません。この枠組みの中でヤクザの撲滅ということを位置付けないと、見えてこないことがあると思うのです。それが、僕が先ほど申し上げた、日常生活の中で公安秩序を市民の意識と生活感覚の中で実践していく政治の衛生化ということなのです。

中島 神戸大の梶谷懐先生が高口さんと一緒に『幸福な監視国家・中国』という本を書くわけです³。社会におけるある種の衛生化が、中国でテ

テクノロジーと共に一挙に浸透していくわけですね。それはもちろん共産党のガバナンスという側面もあるのだけれども、同時に、市民の他の市民に対するある種の根底的な不信感といいますか、そういったものがあって、正しく監視してくれないと困るというわけです。それは、僕は中国だけの現象ではないのではないかという気がしています。今、お話を伺っていると、日本の市民社会自体が、やはりある種の衛生化をしていくことによって、正しく監視していく方向に行ってしまうですね。

金

そうですね、行ってしまっていますね。実は昔の文献を読んでいると、国際的なマネーロンダリングなどは全く問題にならなかったことがわかります。こういったことが問題化され始めるのは、1990年代以降、つまり冷戦以降です。では、なぜあれだけ増幅されたのか。具体的な事件、現象の背後をどうやって読み解くのか。法的な用語で言うと、犯罪要件を満たしてケースに仕立て上げるといった場合に、1991年のソ連の崩壊以降、情報戦を担っていた機関が、元々あった国際的なある種の犯罪的で非常にダークなインダストリーを、どうやって犯罪として公に仕立て上げるのかということが非常に重要な問題となってくると思います。そういう枠組みの中でどのようなところに目が向けられるのかというと、例えばフランスのパリ郊外のアラブ系住民が多いところでどういう取引がなされるか、あるいは韓国の場合だと1990年代以降「犯罪との戦争」と銘打たれましたが、日本や東南アジアから入ってくる麻薬とどう対峙するのか、といった具合です。要するにスラム街のようなところに全部目を向けて、そこで繰り返られる行いを犯罪のケースに仕立てあげながら、社会的な衛生的意識というものを育てていく。例えば、先ほどパリの郊外の話をしましたけれども、ロサンゼルスなどの場合は、メキシカンもしくはラテン系住民に対して、ルポルタージュやドキュメンタリーなどを通して、非常に暗い、もしくは汚染されたような表象を作っていく。それはロサンゼルスに限らず、世界のどこでも出てくる非常に爆発的に増幅する表象、ナラティブになっていくわけです。

³ 梶谷懐・高口康太『幸福な監視国家・中国』NHK出版、2019年。

そうなっていくと、社会全体において、可視的な空間的にもそうだし、意識的にもそうだし、人種的にもそうだし、いろいろな契機によって衛生的な意識がどんどんせり上がってくる。そういう多様な場における衛生的意識、実践の積み重ねが、結局こういう社会もしくは社会的な意識につながっていくということだと思のです。

中島 もちろん、その衛生化を人々が望んでやっているわけですから、それはそれで、望む社会が到来したのではないだろうかと一方では思うのです。でも他方で、やはり中間団体的なものがどんどんなくなってしまっていて、個人が直接に、例えば国家なら国家と向き合わなければいけない羽目に陥っているわけでしょう。

金 全くそうですね、本当に。

中島 中国の歴史を振り返ってみると、中間団体が唐宋変革でなくなって、宋以降、皇帝と人々が直接結び付くような関係になりました。それはある種のデモクラシーなのだけれども、でもそれはデモクラティックな専制であるという見方がなされるわけです。だから、中間団体が消えるということは、ある種のデスポティズムに陥る可能性を飛躍的に高めるといことになります。世界を見てみると、まさにそういう権威主義的な国家がどんどん出てきているではないですか。

金 おっしゃるとおりだと思います。

中島 やはり民主主義は、どこかで中間団体というものをうまく利用しないと機能しないとわれわれは考えてきたのです。ところが今の分析のように、衛生化することによって、あらゆる中間団体が要らなくなる。そうなると、民主主義というものの自体が変質するか、あるいは要らないか、そのようになりかねません。

金 僕の書いている本の内容とほとんど重なるわけですけども、例えば1980年代、あるいは今も日本の漫画の中では不良は非常に重要な題材の一つではないですか。でも、不良の漫画を見ると、不良、グレルというのは一種の甘えでもあるわけです。自分が悪さをして、先生なり親なり友達なり、もしくは地域のコミュニティなりで、何かそのグレルな心情を理解してくれるという前提があります。受け入れられる、もしくはいろいろな層によって自分のグレルな行為が許されるという甘えの構造の中で、グレルという行為が成り立っているわけです。

その甘えの行き着くところが、実際社会の中ではヤクザだったと思うのです。甘えを重ねて、結局ヤクザに行くとその甘えが効かなくなって、その中である意味、社会化されていく。そういう構造があったと思うのですね。ただ、その甘えるといことが可能になるためには親密性がないといけません。親密性や近さは、国家というよりもやはり地域であったり、学校であったり、友達であったり、そういうところから始まっていく。そういった中で成り立つ関係の形が甘えの関係だと思います。中間団体がなくなるというのは、この甘えの状態がなくなるということですね。

中島 そうですよ。

金 だから、今、日本社会の中にはもちろんヤンキー的な存在もいるのですけれども、記事などを見ると、学校でグレル連中というのは圧倒的にいなくなっただけですね。田舎はまだそうではないと思うのですけれども、特に都市部では圧倒的にヤンキーがいなくなったという記事を見たことがあります。なぜいなくなったのかと思ったら、やはり甘えの構造が効かなくなった社会、甘えの構造がもう成り立っていない社会、学校があるわけですよ。そういう中では、グレルということよりも、引きこもるか、陰鬱ないじめになるのか、そういうことになっていくしかない。

中島 なるほど。

衛生化と再起不可能性

金 こういう現象は、甘えを許す、国家より小さい、狭い範囲の中の空間的な関係の広がりやどんどんなくされていくことに根差すと思います。それは先ほどの話に戻すと、やはり衛生化だと思うのです。ドロドロとした顔を介したパーソナルな関係によって成り立つ人間関係がなくなって、全くの匿名性、ルールと自分、もしくは組織と自分みたいな形で、どんどん顔のない、体のない、身体性のない関係に置き換えられていく。これはやはり衛生化の影響なのかなと僕は思うのです。

先日、東京カレッジで韓国の K-POP と民主主義の話をしたのです

けれども、K-POP と民主主義も全く同じような経路をたどっているのです。実は 1990 年代中盤から後半辺りまでは、ほとんど韓国の歌手は不良だったのです。それが今の K-POP のアイドルを見たら、みんなもういい子ばかりです。

中島 清く正しくですね。

金 ええ。ファンももう、誰よりも正しい市民・人間として、アイドルの行動を規制したり。本当に小さいスキャンダルが一つでもあったら、そこからはもう再起できない。

中島 厳しい。

金 ええ、厳しい世界なのですね。これこそ本当に衛生化された文化産業であって、前のように、本当にいわく付きだらけの歌手ということは、もうないのですよ。今の韓国のアイドル社会においても、ちょっとグレていた子がアイドルになるということもあり得るわけじゃないですか。でも、その過去がバレると、もう再起不能なのです。退出を迫られるわけなのですよ。

中島 なるほど。

金 こういう社会ってどうなの？ という。

中島 どうなのですか、こういう衛生化された社会は。

金 僕は、衛生化された社会の帰結はいろいろあると思うのですけれども、一番深刻な帰結は再起不可能性だと思います。再起ができない、やり直しができない社会になっていく。一度、衛生的な感覚の中で排除されると、もうやり直しが効かない。そういう社会になってしまうのが一番怖いのかなと思います。

中島 若者は本当にそれを深刻に受け止めますね。

金 多分、だからみんな怖がっているわけですよ。すごく不安になりながらやっています。例えば、非常に単純な統計なのですが、今、韓国の場合は大学の定員はそんなに変わっていないのです。もちろん大学の定員自体は少し減っていますが、学生の数自体が減っているから、大学に誰でも入れる時代です。地方の大学や小さい大学には、定員を満たせない大学が多いのです。われわれの世代から見ると、大学に非常に入りやすくなったのだから、素朴に考えると、競争がそれだけ激しくなくなったのかなと思うわけじゃないです

か。でも、今の競争の狂乱の仕方は僕らの時代の比ではないです。なぜなのか。われわれの社会科学的な数字的な感覚の中では、当然の成り行きとして競争というものが和らぐはずですよ。でも、そうではないのです。大学に入るのがそんなに難しくない社会だったら、いろいろと多様な進路の模索など、そういうものが出てくるのかなと思ったら、全く逆なのです。

中島 逆なのですね。

金 それはなぜかという、結局、いい大学に入らないと、今申し上げた衛生的な排除として自らを受け止めてしまうからだと思います。

中島 なるほど。

金 「自分はもう社会の中で必要とされていない」という感覚です。自分が社会の中で担えるある種のストラータが決まっていて、その範囲の中で生きるしかない、というように、近代社会が建前として持っていた自由と平等が全くなし崩的に、擬似身分制というところに逆戻りしていく。この身分制が前近代の身分制よりもたちが悪いのは、みんなある種の敗北感の中でその身分を受け入れるということです。

中島 まあそうですね。

金 昔の身分制は生まれながらだから。

中島 もうしょうがない。

金 しょうがない。天分の問題だから。でも今の身分制は。

中島 能力の問題。

金 能力の問題で、負け意識の蓄積の中で生きるしかないという閉塞感があります。

中島 ルサンチマンがすごいですね。

金 すごいですよね。日本や韓国のSNS、そしてアメリカのトランプ現象などもその一例だと思うのですけれども、例えば女性、外国人、難民といった集団的カテゴリーをターゲットにしてルサンチマンを吐き出すという状況が出現してしまいますよね。

中島 弱そうだと思われる立場の人をやっつけることになるわけですね。

金 やっつけるしかないのです。そういう様々なグローバルな現象の中で見えてくるのは、やはり中間団体、他にも色々な言い方があると思う

「参加と責任」という感覚の不在

のですが、そうしたものがどんどん破壊されていった結果なのではないかと思うのです。

中島 ということは、昔はヤクザも含めたある種の間団体があって、そこには甘えが許される構造があり、そこで暴力が一種ガス抜きされていたところがあるわけです。ところが今の時代というのは暴力のガス抜きというものが無い。

金 ないですね。

中島 衛生化されているからですね。ところが、ルサンチマンはもうすごい勢いで蓄積されているわけです。そうすると、そのはけ口を求めてどこかに噴出するのですが、こういう現象を私たちはあちこちで見ているわけです。

金 見えていますね。そうなってくると、先ほど先生がおっしゃった民主主義というものが成り立たない。当然の成り行きだと思うのです。なぜかということ、そのままその秩序を敗北感と共にみんな内面化するからです。「どうしようもない、自分は」みたいなことになるから、そのようになると思うのです。こうなってくると民主主義は建前だけになってしまって、もう専制主義ですね。

中島 ですね。

金 恐るべき体制になっていくということではないでしょうか。

「参加と責任」という感覚の不在

中島 社会科学研究所の宇野重規さんは、民主主義は、やはり基本は参加と責任だというわけです。何らかの団体、それは自分の地域でもいいのだけれども、それに参加して、そのありように責任を持つ。この感覚がどうしても必要なのだとおっしゃるのです。ところが、私たちはいろいろなものから切り離されてしまって、しかも敗北感につきまとわれているわけです。そういう人が参加と責任と言われたって、持ちようがないわけですね。

金 駄目ですね。

中島 何に一体、参加するのですか。それは私たちを排除したものではないですか。それに責任を持って、なぜ私が責任を持つのですか。こう

した問いが出てきます。

金 そうですね。

中島 だから、民主主義のいろはが、もう根本的に機能しない。

金 極端な話ですけれども、こんなエピソードがあります。授業で、ある種の自主的な共同性の経験、自分が他人との協調なしに生きられない、他人との協調の中でこそ何かができるという経験をレポートにして提出しなさいという趣旨の課題を出すと、必ず出てくるのがコンピューターゲームなのです。

中島 ゲームね。

金 僕はゲームをしないのですけれども、あまりにもレポートでそれが頻繁に出てくるので、何なのだろうと思って、そのゲームを1回やったことがあります。それはシューティング・ゲームで、5人ぐらいでタッグを組んで、後衛で守るチームと前へ行って戦うチームとに分かれる、というようにチームワークが非常に重要なのです。その中で共同性の経験をしました、というレポートがすごく多いのです。「ええ？ これはどうなんだろう」と思ってしまいます。というのも、この経験は、ある意味非常に軍隊的ではないですか。

中島 シュートですからね。

金 ええ。軍隊的です。銃や暴力こそ排除されてはいますが、ある種のミッションにおいて協調するという、この経験が彼らにとっては協調の原体験なのです。これと共に一番多いレポートの題材が、高校生のときに共同で何か宿題をしたというものです。

中島 なるほどね。

金 ゲームと宿題で、一見違うようだけれども、これは実は同じなのです。

中島 構造は同じですね。

金 はい、構造は全く同じなのです。何かのミッションが与えられて、それを解決する。問題解決系の協調性なのです。でも、これだと、ミッションが与えられないと協調性がないというだけではなくて、協調性はミッションありきのものになってしまいます。目的は外部から与えられて、その目的に沿った何か創意的な、もしくは非常にバランスの取れた集団の作り方、協調の仕方という発想になっていく。だから、

目的を自分たちでつくって何かをやっていく、もしくはこのチームの維持のために自分たちがどうやってお互いにコミュニケーションを取るのか、あるいはお互いにどのようにルールを決めてやっていくのか、という発想の中での協調性・共同性というものはないわけです。この構造では、経験として、今おっしゃった民主主義における参加、何かに携わって一緒にやってみるという経験とは全く違った形の協調性しか残りません。これはもう民主主義とは相容れない協調性だと思ふのです。

中島 だって、それは民主主義ではないところだって十分できてしまうことですよ。

金 できてしまうわけですよ。

中島 例えば、今よくケアが問題になるではないですか。やはりケアをするということが人間のコミュニティにとって結構根本的なものかもしれないということで、もう一度コミュニティをケアの側から構築し直していこうという議論があります。今の、それこそシューティング・ゲームのような、目的があったりミッションがあったりしてみんな頑張ろうというのと、ケアの論理は、あまり相容れないと思うのですが。

金 全然違いますね。

中島 そうすると、ケアみたいなものはどこで成立するのでしょうか。

金 多分、A、B、C、D、Eというメンバーがいたら、ミッションを完遂するためにはEが必要なのに、Eにちょっと不具合や不調が生じたといった場合に、ケアの感覚というものが発動されるのではないのでしょうか。でも、それはケアといえないですよ。

中島 うーん。ケアは結構、異なるロジックだと思います。ミッションありきではないと思うのですね。

金 そうですよ。

中島 そうではなくて、その人がいるということ、それ自体が根拠になるものではないですか。別にその人が負け組だとか、そんなことは関係ないわけです。

金 全然関係ないですよ。

中島 だから、ケアの論理というものがやはり社会の中で際立った方が、よ

りましな社会になるという言い方がよくなされますよね。ところが、分析していただいた、今の社会の方向は真逆ですよ。

社会概念の崩壊と喪失

金 真逆ですね。古典的な話をする、デュルケームに至るフランスの社会学の議論では、革命後にある種の社会的なものが実在するということを頑なに証明しようとする。そして、その中でこそ個人というものが実存できると論じています。でも、このレガシーが全くなくなってくるということです。

中島 ないですよ。

金 だから、僕の親しい社会学の先生などはそういうことをおっしゃるのです。統計や実証的な研究をやっている方はそういう意識はそんなにないと思うのですが、理論社会学をやっている先生方は、やはり社会的なものということはどうやって人々に納得させるのかということが非常に難しくなっていると云います。昔の社会学では、社会という概念については、説明が要らなかったわけです。

中島 当たり前のもだった。

金 社会があるから社会学があるのだということが当たり前だったので、これをどうやって説明するのかということに悩まなかったのです。でも今の社会学は、学生さんたちが、ある意味では根本的な問いを投げかけているのです。「社会って何ですか」という。

中島 そういうことですよ。

金 社会学を支えている哲学的な次元の問いを投げかける。そこに理論社会学が答えないといけない。だからデュルケームの時代の社会学の課題にもう一度戻っているという見方をされる研究者もいるそうです。学問的には、それで根本的になるということは、そんなに悪くない話だと思うのですが、ただ、社会学の先生などは、社会というものを身体レベルで直感的に経験したことの無い学生であるからこういう質問をしてくる、ということ自体を問題視しているわけです。昔は、社会というものが全く無意識の中で当然の前提だったのです。

中島 自明のことだった。

金 それを問い直せ、という根源的な問いはある意味プロパーな哲学的な問いの立て方ですが、今の学生は、社会があって個人があるというこのロジックが、身体感覚として、全く前提として感知できていないわけです。これが結構、社会学を教える立場としては難しいらしいのですね。

中島 考えてみたら、ケアだってアウトソーシングすればいいわけでしょう。ケアをミッションにする会社に任せてケアしてもらったらいいではないか。こういう話ですよ。自分たちがソーシャルな中で相手を気遣って、尊重して、ある種のコミュニティをつくっていくのだという発想に行かなくてもいいわけです。アウトソーシングしなさいと。だって、「食べる口」とおっしゃったけれども、食べるといったって全部アウトソーシングでいいわけです。ウーバーイーツが持ってきてくれるのではないか。その仕組みさえあれば何の問題もありません。こうなりませんか。

金 そうですよ。今、先生がおっしゃった脈略でいうと、われわれがケアと聞いて一番最初に思い浮かべるイメージが、老人の体を洗ったり車いすを押したりというものです。これは、まさにアウトソーシング可能なケアで、そういうものがケアの中心になっている。実はケアというのは、先ほど先生がおっしゃったニュアンスでいうと、それを含めた、もっと広い、人間の根源的な社会性に関わる問題ですよ。アダム・スミスだと、シンパシーと呼ぶような問題、共存在、共存する、共感する、という次元を含んでいるわけです。ですが、こういった次元はなかなかイメージされにくいということがやはりありますよね。

中島 恐らく老人に対してわれわれはまずケアという言葉を使うわけですが、赤ん坊、あるいは障がいを持っている人、あるいはそうではない健常者でも、別にみんながみんないつも元気なわけではないですよ。そうすると、本当はケアしたりケアされたりするという場所があった方が社会としてはずっとましだという気がするのですが、もうそれが根本的に消えるわけです。

金 そうなんです。最初の話に戻すと、やはりヤクザの消滅というのはそういうことを言っているのではないかという気がします。

中島 そうなりますよね。もちろん衛生的にはヤクザがなくなった方がいいと皆さん思うのだろうけれども、でも、それが果たしてきたいろいろな役割があるわけです。ヤクザが存在した社会のあり方があったのですよね。でも、それ自体がもう崩れてしまってなくなっているわけでしょう。

金 そうですよ。

中島 そういう全く新しくなってしまった社会、あるいはその社会的想像の中で私たちは暮らしていかななくてはいけない。それをあなたは望みますかということですよ。

空間の分割、社会の細断

金 こういう動向は、僕が日本に留学していたとき、2000年代ですが、日本の中で6年足らず暮らす中で、ここは法制的なものよりも非常に自律的な神経がまだ機能している社会だということを、いろいろな場面で感じたことがあるのです。商店街だとか、普通にコミュニティというものが実感できる何かとか、そういうところが日常的に感じられる社会だったわけです。もちろん、日本社会の中で外国人の生活者としていろいろな制度的な不便や、外国人に対して与えられるある種の社会的な資格の問題など、そういうものは制度的に、もしくは感覚的・日常的に理不尽なものもありましたが、それはどこの社会でもあったと思うのです。

ただ、韓国に帰って、ちよくちよく日本に出張で来たり、あるいは今回のようには長い間、1年ばかり滞在したりして思うのは、そういうものが非常に弱くなったということです。本当に体感的な経験のレベルの話なので突き詰めて論理的に何かを語れるわけではないですけども、本当に隔たりが強くなった社会ということが、SNSの書き込みや、それだけではないいろいろな場面で感じられるのです。それは自分がたまたまそう感じたのかもしれないのですが、でもやはり、今ずっと述べてきたような流れと僕の実生活の経験が無関係ではないと思われるのです。ここ10年、15年ぐらいの間に何が変わったのかということが非常に気になるのです。現象レベルで見えるところか

ら深層レベルにいたるまで、何が変わっていったのかというのが非常に気になっています。まだ明確な何かが見えているわけではないのですが、その模索の一つとして、ヤクザ論ということを発想しました。

もう一方で、韓国社会だとこの変化はもう明確なのです。それは何かというと、例えば韓国に行くと、都市部だけでなく農村に行っても今はもう高層マンションだらけです。

中島 農村もですか。

金 農村それ自体というよりも地方都市の郊外などですが、あれだけ建ててどうするのというぐらい建てているのですね。それは、近代化され、衛生的になり、裕福になった自分の生活のレベルという欲望を投影するということもあるのですが、そういう欲望によって建てられたマンションがどういう社会的な現象を巻き起こしているかというと、例えば高層マンションが建って、その敷地の中にある小さい公園などに他の地域に住んでいる子が遊びに来ようとする、入れないようにするのは、

中島 なるほど。それはまさに gated city のようなものですかね。

金 そうです。もしくは、公共の住宅と全くプライベートな高級マンションがあると、一緒の学校に行くということがあるではないですか。そうすると、高級マンションに住んでいる子どもが公共住宅に住んでいる子どもをけなすとか、差別するとか、そういう現象がもうあちこちで起きているわけです。そうなってくると、先ほど言った衛生化が、ケアという次元などはもう通り越して、これが本当に憎悪になってくるのです。だからといって、では高級マンションの中にはコミュニティがあるのかというと、そうではないのです。住宅の価格を落とすような行為をしないかという、お互いによる監視のシステムがあるばかりなのです。

中島 なるほど、たまらないですね。

金 もう本当に信じられない、たまらない状況なのです。これはプライベートな話なのですが、僕は真剣に、どこか他のところに行って住もうかなと思ったこともあります。自分の団地がそうだというのではなくて、韓国社会の中のそういう動向がひど過ぎるからです。

韓国社会の中にはいろいろな問題がありますけれども、去年の夏から11月、12月ぐらいにかけて問題になったのは、小学校の先生の自殺事件です。何が理由かという、親御さんたちの…

中島 クレームですか。

金 はい。クレームがひど過ぎて。そのクレームがもう信じられない内容なのです。例えば、2人の子どもがけんかをして、先生が「Aの子がBの子に謝りなさい」と言ったとすると、その言葉を聞いた親御さんが先生にメールでめちゃくちゃクレームを言うのです。「うちの子はそんな子じゃありません」とか、「ちゃんと経緯を作成して見せてくれるまでは納得できません」とか。これまで学校は、子どもを教育し社会化する、という機能を担ってきました。ところが今は、学校という機構が社会の一つのセクターとして子どもの成長を一緒に担っていくという、このシステムがいいとか悪いとかの問題を超えてしまって、多くの親御さんたちが現存するそういった建前そのものを全く否定するという言動に出るのです。学校は単なる託児施設扱いなのです。こうなってくると、学校という場所をどうやって再生するのかという議論になっていくわけですが、俯瞰して見ると、やはりこれは中間団体の消滅という問題につながっていると思います。子どもを育てるとい場合に地域のいろいろなアクターが協働してやっていく、子どもはただ単に親の子どもではなくて社会の子どもだという意識が全くないわけです。こういったシステムへの不信や否定から生まれてくる意識と行動は、まさに先ほど先生がおっしゃった専制的な民主主義そのものなのです。「私は、子ども人権条例に出てくるルールに則って学校に対してこういうクレームをしますよ」という、このロジックしかないのです。こういう社会はどうなのだろうと思います。

中島 なかなかたまらないものがありますね。

金 本当にそうです。セミナーや大学院の授業で、2時間ぐらいディスカッションをすともう頭が痛くなって、みんなちょっと一杯やりに行きましょうというかんじになるのです。韓国社会のこういうドラスティックな変化はどうなのかなと思いますね。

中島 社会はいろいろ変わっていくのですけれども、教育の方に振れ過ぎた社会、もしくは教育化された社会に少し振れ過ぎている気がいたしま

す。しかも、それでほとんどの人が敗北感を持つわけですよ。

金 幾つかの大学に入れなかったという敗北感。その幾つかの大学も、比率的にいうと決まっています。要するに入試で成功という大学は決められていて、大体、1年の入学の定員は、それらの大学を合わせると2万ぐらいになるのでしょうか。でも受験生は40万人です。

中島 2万人以外の三十何万人はみんな敗北感を持つわけですね。

金 そうなのです。

中島 そんなこと、おかしくないですか。

金 いや、おかしいですよ、もちろん。めちゃくちゃおかしいです。でもそれを甘受して生きている。僕の感覚の中では、これでよくまだ生き延びているなという感覚なのです。

中島 それこそ、延世大学もそうだけれども、そういうトップ大学が入試をやめてしまったらどうですか。

金 いや、それは無理でしょう、多分。

中島 もう全入、全員OKにしてしまうのです。

金 多分、国が滅びない限りは。

中島 延世大学は、国が滅びても存在しますよ。

金 そうかもしれないですね（笑）。冗談で、延世は国家が滅んでも生き延びるだろうという話はするのですけれども、その延世が生き延びる原動力がまさに今言った社会なので。

中島 いや、でもそれは逆ですよ。大学が果たす役割はそういうおかしな社会を少しまともな方向へ向き変えるということですよ。

共同性と「養生」の作法

金 もちろんそうです。ただ、少し抽象的な話に戻しますが、昔の韓国の民主化の運動は、歴史的に見てみると、結局、1980年代以降に出てくるマルキシスト的な流れの中で特徴的なものだったと思います。第三世界の脱植民地化の経験の中でも共通すると思うのですけれども、マルクス主義は根源的にはインターナショナリズムですのでナショナリズムと対峙する。だから、ナショナリズムの契機とどうやって折り合いを付けるのかということが非常に重要な課題でした。そういった

枠組みの中から見ると、韓国のマルキシズムはやはりナショナリズムと非常に強いつながりを持っていたんです。このマルキシストたちがナショナリズムというものを信奉し、その勢力は非常に大きかった。ただ、いわゆるオーソドックスなマルクス主義者たちもいて、彼らは非常にマルクスの真意やマルクス主義の真髄を重視しましたが、ナショナリズムと結びついた流れを単なる脱植民地運動でマルクス主義ではないと批判しました。

中島 外れていると。

金 はい。当時はそのような論争の構図だったのですが、今になって考えると、なぜあれだけナショナリズムに対するこだわりがあったのかということ、やはり植民地経験だけでは説明されえないと思うのです。マルクス主義者という人たちにとって、社会主義的な社会というのは、非常に科学的に設計された計画経済を根幹とする、ある種の資本主義を超えた未来的な社会というよりも、もう少しその前の段階の、先ほどずっと述べてきたようなケアや地域のつながりなど、非常に伝統的なものに支えられた、そういうイメージだったのだらうと思います。だから、経済的にみんなが豊かになるという以前に、みんな何かしら水平的な目線で共通性、共同性をどうやって確保していくのかという問題が重要だった。ナショナリズムとマルクス主義の結合といった場合に、一方ではそこに主眼点がやはりあったのだと思うのです。だから彼らにおいては、革命に関しても、なかなか国家の乗り越えという発想は出てこないのです。それは、国家というものにそういう共同体を投影しているからなのです。それが韓国のレフティストのレガシーの中では非常に強く今でも残っています。

ただ、今はそういうマルキシスト的な勢力がほとんどいなくなっています。では革新的な政治的なセクターが国家に対してどのような向き合い方をするのかというと、全くもう、ほとんど一律的に合法性を切り札にするのです。国家は合法的に機能すればいい、国家というのが合法的にきちんと機能しさえすれば民主主義というもの成り立つのだ、と。先ほど言った共同性の次元を、革新的なグループでさえ全く考えないわけです。

だからこれはある意味、韓国の歴史の中でナショナリズム的な考え

方が弱くなったということにもなるのですけれども、それが見せてくれているのは、やはり共同性、中間団体的なもの、ある種のケア、そういった民主主義の非常にパーソナルな次元での関係性が、革新的な考え方をする政治家の中でも全く弱まっているということだと思えます。

中島 いや、そうすると民主主義の条件が成り立たないですよ。それを切り崩しているという感じがします。たまたま去年、NHK で見たのですけれども、鳥根県に大田市というのがあるのです。本当に田舎で、石見銀山の近くの近くなのですけれども、そこに大森町というところがあります。実は私の父親がその大森町の近くの生まれで、小さいときに僕はよく大森町に行っていたのです。そこには親戚もいました。なぜNHKが大森町を取り上げるのかなと思ったら、若い人が今こぞってそこに移住しているというのです。「どういうことだろう」と番組を見ていると、結局、子どもを連れて若い親たちにとって、子どもをちゃんと見てくれる地域がそこにあるのです。だからすごく生活しやすい。そこで自分の今までの経験を生かして小さなビジネスをするのですけれども、それもみんなに支えられて、回るわけです。だから非常に暮らしやすい。そこに惹かれて若い人がどんどん来るのです。どんどん来るといっても、面白いのは、その大森町は1年に1回、神社に集まってみんなで写真を撮るのですが、1枚の写真に収まる人しかいないのです。だから基礎自治体として本当に小さいというか、顔が見える、パーソナルな関係がちゃんと成り立っているのです。

日本の場合は明治の大合併から始まって、昭和、平成で大合併をずっと繰り返して、基礎自治体の数は本当に減りました。顔の見える関係がどんどん切り詰められてきていて、今、それこそ家族の間も怪しいところまで来ています。先ほどの大森町みたいなものが非常に例外的なものも散在してあるという感じなのです。僕はでも、そういったものが本当は民主主義の原点にならないと、社会は持たないのではないかと思っています。

最初の方に衛生化とおっしゃったのですが、前近代の言葉で言うところの「養生」と言う言葉があります。衛生とは全然違う生に対する考え方です。京大に西平直さんという先生がいて、『養生の思想』という本

を書いて、貝原益軒に依拠しながらだったと思うのですけれども、養生の本当の根本は何かと問われます。それは共に楽しむことなのだと
言うのです。ひとりで楽しむことではないのです。自分ではない人を
きちんとケアして共に楽しむということができないと、生を養うとい
うことは絶対にできないのだということをおっしゃっています。で
も、そういったものが本当にどんどん消えていくフェーズにもう韓国
は入っているし、日本も入っている。あるいは他の国もそんなに変わ
らない。

金 多分、そうなのではないですかね。

中島 どことも似たような状況なのではないでしょうか。遅かれ早かれ、時間
の問題という気もするのですね。

金 中世史をずっとやっていた阿部謹也先生が、ヨーロッパの市民社会、
民主主義の条件は、実は革命以降に出てくる個人主義ではなくて、中
世の社会が保っていたある種のギルド、組合、アソシエーションを中
心とした社会の仕組みだと言っています。結局、そういう中間団体的
なものがヨーロッパの民主主義のマトリックスになっているというこ
とをおっしゃっているのです。例えばドイツだと、冬の暖房費は家庭
が圧倒的に安くて、企業が圧倒的に高いです。これはなぜなのか。資
本主義的な制度学派なり、ケインジアンなり、マクロな経済的な視点
から説明することもできると思うのですけれども、彼が言うのは、次
のようなことです。中世の人は、パンを作る、革製品を作るなど、み
んなどこかの組合に入っていたということです。ある物を市場で買う
といった際、例えば肉の組合、ソーセージを作る組合に入っている人
たちが市場で買う場合は価格が違って高く売ららしいのです。例えば
一般の生活人が買う場合は100円だとすると、ソーセージの職人たち
は200円で買わないといけない。他で仕入れることはできないから、
必ずそうになっている。なぜかという、彼らは肉を通して利益を得る
から、だから高く買うしかないということです。この伝統が公的な暖
房費につながっているという分析をされるのですね。

中島 面白いですね。

金 その感覚の中で、当然、肉も石油もガスも公的な資源と見られます。
だから、マーケットに売られるものは全部公的な資源なのだというわ

けです。これによって利益を受ける連中と、これによって生活を支える連中は、当然その価格が違ってこないといけないという、この綿々と流れるメンタリティが現在のヨーロッパ社会の根幹になっていることを言うのです。それは非常に説得力があって、やはり実際ヨーロッパに行ってみると、個人主義、個人主義と言いますがけれども、そんなに個人主義的ではないですよ。

中島 全然ないですよ。韓国や日本の方がはるかに個人主義的です。
金 はるかにそうです。個人主義的ですよ。個人主義的な行動の様式にはいろいろなパターンがあると思うのですがけれども、共有するという点に関しては、やはりヨーロッパ人の持っている独特の作法があって、僕は日本にも多分あると思うのです。

中島 あったと思うのですよ。韓国も同じで、あったのですよ。
金 もちろんあったと思うのです。

中島 日本だって前近代を見ればいろいろな、例えば何とか講というものがあるではないですか。ああいうアソシエーションがあったり、あるいは連歌や俳句で会を持つわけです。もちろん組合もあります。いろいろな組織に属しているということが当たり前だとは思いますが、今やそれがきれいに消えてしまいました。

金 消えていくという。

中島 会社ももちろん、もうそういう場所ではなくなっているわけですから、本当に寂しい人たちだらけになってきたと思います。

アジールの平準化と近代

金 そうだと思うのです。ただ、僕がヤクザ論を書くときに駒場で一回、もう一つは韓国で発表したのですが、オーディエンスからは、「ではお前はヤクザを肯定するのか」と問われまして。ヤクザにユートピア的な何かを…。

中島 ノスタルジーを持っているのかというわけですね。

金 全くそうではなくて、結局、ヤクザを通して中間団体を論じるときに重要なのは、網野善彦が言っているアジールなのです。アジールというのは別にユートピアではないわけです。

中島 ない、ない。

金 アジールとは何かというと、例えばお寺などですよ。人を殺してお寺に逃げ込むと官吏が追跡できない。ただ、ではお寺に入るとその犯罪者はホッとするのかということそうではなくて、普通の社会よりもめちゃくちゃ厳しい規律の中で住むしかないわけです。アジールという表現でもいいですし、もしくは中間団体でも何でもいいのですけれども、僕が考えたいのは、違った可能性があるのかどうかということです。可能性というとおかしいですが、社会があって、その社会が全体的な、画一的なルールを持って序列化するのではなくて、異空間を持っているのかということが重要なのだと思うのですね。

中島 そうですよ。

金 その異空間との緊張間の中で社会がどうやって成り立ってくるのかという、その緊張性が非常に重要であって、ノスタルジックに「一昔前の農村はこんなことで良かったよね」ということを言いたいわけではないのです。一昔前の農村は、パーソナルな関係だけれども…。

中島 大変きついですよ。

金 めちゃくちゃきついですよね。その中で非常に問題もあるわけです。例えば村八分とか、セクシャル・ハラスメントの問題とか。

中島 パターナリズムですね。

金 家父長、パターナリズムの問題など、いろいろな問題を持っている。ただある種、でこぼこした社会的空間の編成の中で、人間がここからあそこに移る、あそこからここに移るといったような、可能性の中で生きていく。そういった人間の生の多様性、立体性の中で確保されていたというのが、僕は重要だと思うのです。

そういった観点から読むと、少し理論的な話になるのですけれども、フーコーの監獄論があるではないですか。あれは多分アジール論だと思うのです。

中島 なるほど、なるほど。

金 フーコーの『狂気の歴史』もそうですし、監獄論もそうですが、彼が分析している監獄という空間もそうだし、精神病院という狂気を閉じ込める空間もそうだし、多分、アジールの空間の変貌に関する話だと思うのです。

中島 それは面白いですね。

金 だから、『監獄の誕生』で規律権力というものがあれだけ主題化されているのではないか、と思うんですね。監獄は何かしら閉じ込める。それは逆に言うと、一般の社会の中で何かをして追い詰められてそこに入ってくるわけです。その中で規律権力ができてくる、そして監獄の規律権力がモデルとなって逆にまた社会が編成し直されるというのがフーコーの議論ですが、それはやはり、アジール的な空間としての監獄が一つの標準的な権力空間として変貌して行って、そのアジール的な空間が無化されていくプロセスでもあるわけですよ。結局、近代化というものは、アジール的な空間を飼い慣らして社会が出来上がってくるというダイナミズムだと思うのです。

そうやって読んでいくと、やはりフーコーがずっと持っていた感覚はよく分かるのです。彼が持っているある種の、どこかで息抜きしないといけない感覚というか。

中島 ヘテロトピアという言い方をしますよね。

金 ええ、その辺の感覚もよく分かる気がするのです。

中島 まあでも、どうですか。今、ヘテロトピアというのはどこで可能なのでしょうか。

カルチュラル・スタディーズの遺産^{レガシー}

金 そうですよ。多分、1980年代以降でしょうか、当時欧米、特に北米ではやっていたカルチュラル・スタディーズで取り組んでいた試みは、まさにそのヘテロトピア的な可能性の模索だったと思うのです。特に1990年代初めに盛んに批判的な研究として出てくるエイズ・スタディーズの中で、感染者の共同体や、その共同体が作り出す、ある種のお互いに対するケアがあります。エイズはまさに1980年代を通して社会衛生の問題だったわけですが、その感染者が集まって、支援者と一緒になってケアの共同体、共同性というものを作り出していく。その原動力の中で、いろいろなサブカル的なものに政治的なものを投影して、共生的な可能性を模索していく。そういう発想が1990年代以降にカルチュラル・スタディーズの中で模索されていたと思

ます。ただ、今、大学の制度の中から見ると、やはりカルチュラル・スタディーズはもう…。

中島 ちょっと落ち目ですよね。

金 落ち目ですけれども、ただ、今いろいろなディシプリンの中でまだそのレガシーが残っていると思うのです。実際に、先ほど島根の事例の中でもおっしゃったように、どこかでやっているはずなのですけれども、社会全体の中での位置づけや、生存の戦略の中で通用しているコミュニケーションの違った可能性など、そういうことをどうやって見つけていくのかということが重要なのではないのかと思います。

中島 いやいや、なかなか息苦しいですね。

金 ええ。息苦しさにはいろいろな原因があると思うのですけれども、僕は、学校での給食についても気になっています。給食というのは素晴らしいことだと思うのですけれども、給食が持っているある種の副作用として、共有の経験の無さということがあると思うのです。弁当は、いろいろな家の弁当、おかずが出てきて一緒に食べるではないですか。僕が学生のときには、弁当を持って行って横の友達と一緒に食べていたのですが。今の給食は、実は食べない子が多いのですね。

中島 そうですか。

金 ええ。給食を食べない。そして、食べなくていいということになっている。食べることを強要できないから。そうすると、一緒に食べるという経験が、あまり生徒さんの中では重要な何かとして経験されないのです。だから、一線の学校の中では、日本もそうですし、韓国もそうですし、いかにして生徒と一緒に食べさせる経験を作ってあげることということが非常に重要なのですけれども、それは作ってできるものではないと思います。だから、給食によって、共に食べるという経験が多分、学校の中ではどんどん弱まっていく。

実は今、家庭の中でも一緒に食べるということが非常に難しくなってきましたよね。

中島 ねえ。孤食の時代。

金 僕はヤクザのことをやりつつ、次の作業として、肉食というテーマも追っているのですね。日本の肉食のことを資本主義と絡めて考えていて、今、具体的な資料を探しているところなのですが、日本の食卓の

問題をずっと追っていると、やはり食品の生産と流通の過程で変貌があるのです。今おっしゃった孤食に合わせた生産と加工と流通の過程です。

中島 コンビニに行けば孤食完成です。

金 多分そのとおりです。そうなってくると、韓国もそうなのですが、玉ねぎをむいたことがない若い人が多いのでよ。なぜかという、全部むいて売っているから。だから、道具と食材をどう使うのかという経験も全くななくなっていますし、一緒に食べるということもなくなっていますし、食を通してどのような関係が成り立つのかということも随分変わってきている。この中で見えるものは何かということを取り組もうと思っているのです。

日本の場合、肉食を考える場合はやはり部落の問題がありますよね。被差別の問題がどうやって食品の資本主義化と結合しながら、民主主義の枠組みの中で問題化されていくのか。政治の問題がどうやって資本主義の問題にすり替えられて、肉食産業と絡み合いながら、その政治的なアジェンダが変貌していくのかということを考えているのです。先ほど言った「食べる口」というのはメタファーですけれども、思想や哲学のレベルではなくて、本当に身体的なレベルで、「暴力」や「食べる」という問題など、そういうところに注目して、近代的な社会の建前の崩壊というものを追跡していくということが、今の僕が一番の課題です。

中島 食べるというのは、ある意味で根源的な暴力ですからね。だから食べるためのリチュアル、作法が発明されたわけです。でも、今みたいな孤食になっていくと、別にどう食べたっていいのです。食べる作法なんて要らないわけですよ。家族で食卓を囲むことがなくなったら、いろいろな作法がなくなる。地域で食べるということがなくなったら、当然それも共有されない。そういうある種の根本的な規範性が欠けてくるのかなという気はしますね。

金 そうですよ。そういった非常に根本的な人間の活動。活動というよりもまさに養生ですよ。その次元が揺らぎ出すと、そこを土台にして成り立っている社会的な規範性が、もう揺らぐしかないのかなと思いますよね。

- 中島** なかなか現代のかつ通史的なことをお考えになっているのですね。普遍的な問題でもありますからね。その中で、やはり日本が一つのフィールドとして機能しているわけですね。
- 金** そうです。
- 中島** そうすると、問題関心としては、一貫しているといえば一貫しているのですね。
- 金** そうですね、もちろん。博論で、丸山眞男がいかに肉体的な契機を禁欲的にずっと遮りながら、自分の知的な営みを構成していったのかということを考えてのですけれども、それは丸山の強みでもあり、丸山の盲点でもあると思っています。
- 中島** もちろん両方でしょうね。
- 金** ただ、今でも丸山のその禁欲的な、ある種、頑なに、肉体的なものに強い関心はあるけれども禁欲的にそれを遮断して自分の知的営みをつくるというのは非常に魅力的だと思うのです。ただ、知らず知らずそこにずっと僕は同化していったような気がします。けれども何年前からずっと、偉い先生方の本を読むのはもう疲れたというのもありましたし、何か読んでいろいろな批判的な文献と突き合わせながら、何か新しい問いを発見していくという、そういうオーソドックスな哲学なり思想史なりの方法から、ちょっと違った仕事をしたいなという発想で、衛生の問題などを考えることになって、方向を少し変えたというようにも見えてていますが、根本的な関心はずっと同じです。
- 中島** ちなみにその本はいつごろ完成するのですか。
- 金** 来年ぐらいにはもう出そうと思っています。
- 中島** 来年ですか。今年では。
- 金** 来年ではなくて今年だ、もう年が変わりましたよね。今年中には出さなければと思います。
- 中島** 本当に楽しみにしております。
- 金** 東大で1年間ずっと支援していただいたおかげで、進めることができました。
- 中島** 韓国に戻ったら、また本当に忙しいでしょうから。
- 金** ええ、戻ったらもう幾つかの役職もありますし。

中島 手ぐすね引いて待っているわけですよ。

金 そうですね。ちょうど僕は延世に勤めて12年ぐらいになるので、もうレーダーにも捕まってしまって。

中島 そうでしょうね。もう逃れられない。

金 まあでも、どうなのだろう。ちょっと地下に潜ってみたいなきもできるのではないかと思いますけれどもね。

中島 でも、日本に1年ぐらいいて、ちょっとは息ができましたか。

金 そうですね、もちろん。とにかく日本の大学と少し違って、韓国の大学はプロモーションのために数を書かないといけないというのがあって。

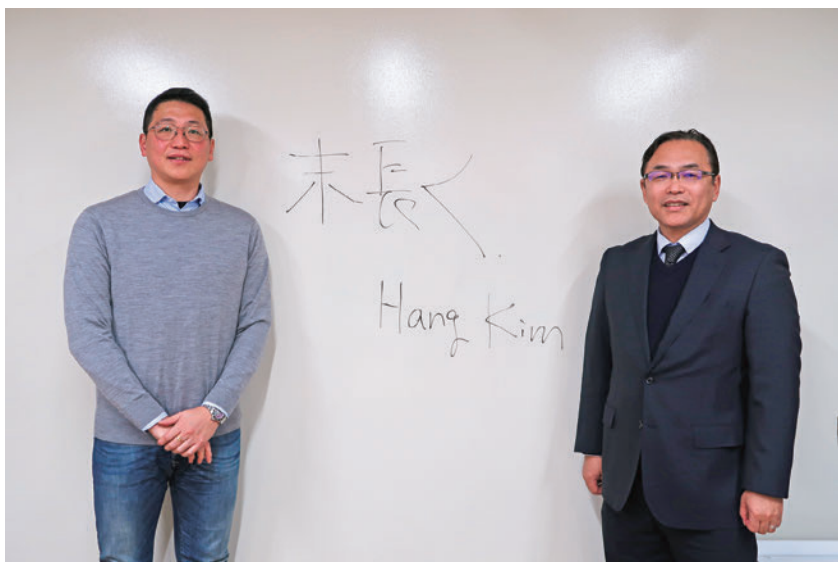
中島 大変でしたね。

金 ジュニアの先生はほとんど本当に時間がありません。論文も1年に3、4本書かないといけないので。それをちょうどクリアしてサバティカルということになって、本当にホッとして、それで怠けてしまったのかなと思いますけれども。

中島 いやいや、やはり息をするのが必要だったわけですよ。今後のますますのご活躍を願っております。

金 ありがとうございます。

中島 ありがとうございました。



対談の後に

不断に再開される対話のために

金杭

2023年、EAAのご好意とご尽力のおかげで東大に15年ぶりに戻り一年間の研究滞在の機会を与えられました。2008年に博士の学位を終え、2011年に現在の大学で教えることになってから初めてのサバティカルでした。コロナのため大幅に遅れたサバティカルだったのですが、全世界的に対面の交流が可能になったタイミングで東京生活が始まって、東京にて十全な意味における研究を再開することになったのです。ただの偶然とは思えませんでした。研究とは間断なき交流と対話ということを経験したことを鑑みると、コロナによって中断された研究がまた東大において再開されたからです。

中島先生との対話はそういった意味で感慨深いものでした。「個」ではなく「多と異と他」の交じり合いのなかでこそ研究が始まるということを教えたいただいたのが他でもなく中島先生だったからです。そのためだったのかもしれない。博士課程のときに戻ったように自分のまとまりのない、粗雑で散漫極まりない着想を勝手気ままに話したのは、この場を借りて再度御礼を申し上げる次第です。

さて、全世界を驚かせた戒厳騒ぎからすでに1ヶ月あまりが経ちました。中島先生との対談は現在すすめているヤクザ研究に関するものでしたが、抽象的なレベルでは現代社会の状況に対する省察だったと思います。それは自由や平等などの普遍的な理念や価値が、翻ってみずからの理念や価値を裏切る現在の状況をどう考えればいいのか、という問題です。去る韓国における戒厳宣言はその最たる例です。大統領は自由という名において政治的に対峙する勢力を一掃しようとしたからです。かつてHobsbawmは20世紀を極

端の世紀と名づけましたが、21世紀にも依然とそのパラダイムは続いているのです。ヤクザ研究はこうした長期持続の状況を理解する一つの視座を設けるためのものです。これからも対話と交流の持続を切に願う限りです。

ソウルに戻って1年間、大学の役職につき多忙な毎日を送りました。その言い訳をいいことにこの対談の整理が大幅に遅れてしまいEAAのスタッフのみなさまに多大なご迷惑をおかけしました。お詫びを申し上げながら駄文を締めくくりたく存じます。

対談の後に

東アジアの未来

中島隆博

キム・ハンさんとはじめて出会ったのは、もう二十年ほどになるでしょうか。韓国語と日本語のバイリンガルで、日本の政治思想を研究する、気鋭の若者でした。そのキムさんもいつの間にか五十歳を超えたわけですから、様々な思いが去来します。

この対談は、キムさんがUIA（潮田総合学芸知イニシアティブ）の客員教授（東京カレッジも併任）として東大に一年間滞在された最後に行ったものです。丸山眞男やジャック・デリダについても見識のある方でしたので、ヤクザという「ならず者」がどのように政治過程や社会過程に浸透しているのかを研究することは、最初は驚きましたが、納得のいくものでした。特に、全体主義が進行する社会においては、こうした人々の研究が重要です。丸山眞男がマッカーシズムの吹き荒れたアメリカ社会に対して、それをアメリカのファシズムと分析した根拠にもなりました。もし丸山が存命であれば、今日のアメリカ社会の状況に対しても、同様の分析をしたのではないかと思わなくもありません。

韓国もまた、現役の大統領が逮捕されるという例外状態を迎えています。キムさんがやはり詳しい、ドイツの桂冠学者であるカール・シュミットが分析したような状況で、敵味方がはっきり区別され、中道というものが極めて困難になっています。最高権力者が超法規的な振る舞いをするという点と、社会の敵味方への二極化という点では、アメリカ社会と韓国社会には重なり合う点もありそうです。是非、キムさんの観察を聞いてみたいところです。

キムさんには、日本語の著作としては、博士論文をもとにした『帝国日本の闕——生と死のはざまに見る』（岩波書店、二〇一〇年）が単著としてあ

り、最近では共著で出版した、『私たちは世界の「悪」にどう立ち向かうか——東京大学 教養のフロンティア講義』（トランスビュー、二〇二二年）に、「民主主義という悪の闘——「他者なき民主主義」とそのディレンマ」を寄稿されています。前者は丸山眞男と丸山が断固乗り越えようとした小林秀雄を取り上げて、両者の限界を別扱したものでした。また、後者は、韓国の民主化を再考しつつ、日本の民主化に大きな役割を果たした南原繁の分析も行なったもので、その両者をどう対話させるのかというものでした。このようなアプローチは、植民地としての朝鮮という視野を同時に有し、問い直しているキムさんにのみ可能なものだと思います。

おそらく、東アジアの未来は、キムさんのような越境的な思想家から紡ぎ出されるのだと思います。その先鞭は、『創作と批評』の重鎮でもあるベク・ヨンソ先生がつけられたのだと思いますが、キムさんはその世代の思いも掬い取りながら、新しい東アジア思想の地平を開いているのだと思います。

キムさんはこれからますますご活躍されることだと思います。そこに東アジアの未来があることは確かですので、刮目して成果を待ちたいと思います。

対談者について

金杭 (KIM, Hang)

延世大学文化人類学科教授。研究分野は植民地主義・政治思想・東アジア近現代知性史。日本語の著書に『帝国日本の闕』（岩波書店、2010）、論文に「普遍主義と植民主義——戦後民主主義の臨界点」（『アジア太平洋研究』42号、pp19-38、2017年11月）、「パルチザンへのレクイエム——北朝鮮と革命の黄昏」（『現代思想』2018年8月号、pp178-186）などがある。韓国語の著書に『말하는 입과 먹는 입』（새물결, 2009）、論文多数。また、ジョルジョ・アガンベンやカール・シュミットの翻訳など多くの訳書がある。

中島隆博 (NAKAJIMA, Takahiro)

東京大学東洋文化研究所所長・東アジア藝文書院学術顧問。研究分野は、中国哲学、世界哲学。著書に、『ヒューマニティーズ 哲学』（岩波書店、2009年）、『悪の哲学——中国哲学の想像力』（筑摩書房、2012年）、『思想としての言語』（岩波書店、2017年）、『危機の時代の哲学——想像力のディスクール』（東京大学出版会、2021年）、『中国哲学史——諸子百家から朱子学、現代の新儒家まで』（中公新書、2022年）、『残響の中国哲学——言語と政治』増補新装版（東京大学出版会、2022年）、『共生のプラクシス——国家と宗教』増補新装版（東京大学出版会、2022年）、『荘子の哲学』（講談社学術文庫、2022年）『日本の近代思想を読みなおす1 哲学』（東京大学出版会、2023年）、共著・編著に『日本を解き放つ』（東京大学出版会、2019年）、『世界哲学史』（全8巻+別巻、ちくま新書、2020年）など。

編集者

崎濱紗奈 (EAA 特任助教)

EAA Booklet-36

EAA Dialogue 11

Hang Kim × Takahiro Nakajima

[金杭 × 中島隆博 2024年1月17日]

著者 金杭 中島隆博

発行日 2025年3月7日

発行者 東京大学東アジア藝文書院

デザイン 株式会社 designfolio / 佐々木由美

印刷・製本 株式会社 真興社

© 2023 East Asian Academy for New Liberal Arts
the University of Tokyo

ISSN 2435-7863



EAA Booklet - 36

Dialogue 11

Hang Kim × Takahiro Nakajima

[金杭 × 中島隆博 2024年1月17日]



E A A

EAST ASIAN ACADEMY
FOR NEW LIBERAL ARTS